

## ウェーバーを「方法」として読む

### Reading Max Weber Methodologically

重田 園江  
OMODA Sonoe

明治大学政治経済学部  
Meiji University, School of Political Science and Economics

#### キーワード

中野敏男 マックス・ウェーバー 理解社会学 禁欲

#### Keywords

Nakano Toshio; Max Weber; Interpretive sociology; Abstinence

*Quadrante*, No.24 (2022), pp.43–48.

ここ数年、マックス・ウェーバーを主題とする新書が相次いで出版されています。2020年5月には、野口雅弘『マックス・ウェーバー——近代と格闘した思想家』（中公新書）、今野元『マックス・ヴェーバー——主体的人間の悲喜劇』（岩波新書）がほぼ同時に刊行されました。そして同年12月に出されたのが、今日取り上げる、中野敏男『ヴェーバー入門——理解社会学の射程』（ちくま新書）です。それ以前の2014年には、仲正昌樹『マックス・ウェーバーを読む』（講談社現代新書）が出ていますから、ここ5年間に学術系新書の大手出版社すべてから、ウェーバーの新書が出ていることになります。

ちなみにその前となると、2006年の牧野雅彦『マックス・ウェーバー入門』（平凡社新書）、1997年の山之内靖『マックス・ヴェーバー入門』（岩波新書）で、その前はおそらく1966年の大塚久雄『社会科学の方法——ヴェーバーとマルクス』（岩波新書）まで遡ることになりそうです。この出版ラッシュは、ウェーバー没後100年（2020年）とも関係していることと思われます。ウェーバー・ブームといえるかもしれません

んが、そもそも厳しい出版事情が学術書を新書寄りにしているともいえるでしょう。

はじめに、中野ウェーバー本の特徴について、すでに挙げたこれまでの新書との違いから簡単に見ておきたいと思います（牧野、仲正本は未読のため言及しません）。大塚本はすでに歴史の部類に属する「近代主義者ウェーバー」、「独立自営の生産者」を評価する、いま読むとかなり分かりやすいものです。こうした戦後啓蒙の遺産を清算する意味で書かれたのが山之内本で、ここではウェーバーの中にある「ニーチェ的モメント」が一つのキーワードになっていました。これは、近代主義者ウェーバーという像から読者を脱却させようとすると同時に、ウェーバーを「ポストモダン」的な近代への懐疑に結びつけるというメッセージを持った本で、話題性もあって広く読者を獲得した新書でした。

改めて山之内本を眺めてみると、第一章に構造論的アプローチと行為論的アプローチの対比がなされています。ここでいう行為論的アプローチというのが、実は中野本のテーマにつな



がってきます。というのは、山之内氏は行為論的アプローチへの着眼から、意味理解と行為との関係、行為の意味づけ(＝動機)を第三者が理解することができるのか、動機は社会化できるのか、行為－意味－社会構造の関係は、などの問題を提起しているからです。これはそのまま中野本が「理解」を中心テーマに据えつつ引き受ける問題群です。

野口本は、伝記的な要素と時代精神、思想との連動性を明らかにすることを主眼とした、バランスの取れた叙述がなされています。とくに、同時代の思想・文化動向との関連づけがかなり掘り下げられており、また、野口氏の年来のテーマである官僚制論への注目が際立っています。

今野本は、ウェーバーを同時代に置き直したらどう見えるかを徹底して叙述した作品で、「ナショナリスト、マックス・ウェーバー伝」とでも形容すべき内容になっています。これ自体は、いままでも時々目にしたウェーバーの脱神話化本に見えるのですが、同時代ドイツの歴史的文脈に深く分け入っているところが特徴的です。そのため、たとえば社会学のもう一人の「巨匠」であるデュルケムを同時代人(ウェーバーより6歳年長)として見るなら、両者の間にさまざまな差異が浮かび上がり、実は学問的な核心にも関係がありそうだなと思わされます。独仏の間で揺れたアルザス出身のユダヤ人デュルケムは、ナショナリストにも普遍主義者にもなりきれず、その苦悩が思想の独自性を形づくっているからです。

以上を踏まえ、再度中野本の特徴を確認したいと思います。中野本は、ウェーバー社会学にとって最も重要な概念として「理解」に徹底してこだわったものです。これは本書の副題が表しているとおりです、ウェーバー社会学を理解社会学として読むことによって、その一貫したパースペクティブと思考の発展が明らかになる

だけでなく、彼の主要テーマがこれまでとは異なったものとして浮かび上がってくるということになります。

理解社会学という名称は聞き慣れないものかもしれませんが、また方法論にがっつき取り組んでいるので、テーマとしてとても地味に思われそうです。しかしこのアプローチが、実は中野本の読みやすさ、理解のしやすさにつながっているのです。

本書はウェーバーの「方法」から出発します。そして、できるだけ論理的に飛躍や破綻のない行程で著書全体が展開されています。哲学の本に通じる構成とでも言えがいいのでしょうか。私自身の経験からすると、新書の読者というのは、忍耐力に欠けることもしばしばあります。そういう読者は「一冊で手っ取り早く全体像をつかみたい」と思って新書を手取るようです。中野本がその要望に応えているかということ、そうではないと思います。しかし、さまざまな著書や生涯の出来事を総花的に散らした本より、方法と論理をきちんと追うことの方がよほど思想家の核心への近道であることが理解できる読者にとっては、この本は難解なウェーバーの方法を平易かつ途切れない論理で説明してくれる、かなり読みやすい本だと思います。これはかつて中野さんが書かれた『マックス・ウェーバーと現代』(1983)のウェーバー研究書としての読みやすさ、門戸の広さから、そのままつなげられている特徴のように思います。

さて、本書の出版がらみの紹介は以上にして、ここからはコメントあるいは質問をいくつか投げかけたいと思います。

1. まず、思想史的な質問です。一点目は、本書のクニースのところで出てくる「利己心というドグマ」(p.40)に関係する問題です。ここでは、利己心というドグマ＝アダム・スミスのドグマ、

とされていますが、当時のドイツにおけるアダム・スミス受容は、スミス＝利己心と自由貿易の擁護者、という単純なものだったのでしょうか。18世紀末のスミス受容が官房学的国家学を廃業に追い込んだとも言われていますが、その後も含め、スミス受容は利己心と自由な市場の擁護の側面に尽きるのでしょうか。実際にはスミスの思想はもっと複雑だという前提で、ドイツでそれがどう受け止められたのか知りたいという意図で質問しています。また、フランスではケネーの系譜から利己心と市場の擁護の学派が力を持ちますが、ケネーとスミスの市場や経済循環の捉え方はかなり違ってきます。ケネーの方が自由放任につながりやすい側面があると思います。

思想史的な質問の二点目は、よりウェーバー読解に内在的な問いです。それは、クニースからシュモラーへと引き継がれる方法論の問題です。ドイツ語圏の方法論争は、まず経済学方法論争として、シュモラー対オーストリアのメンガーの間で大々的に行われた後、社会科学全般の方法論争へと発展していったと思われます。その中でのウェーバーの位置、そしてメンガーとシュモラーとの論争がウェーバーおよび彼の世代の研究者たちに与えた影響について、知りたいと思います。また、この方法論争は、ウェーバーの理解社会学樹立のプロセスとも深い関係にあるように思われますが、いかがでしょう。

2. 次にウェーバーの立場として、心理学批判、流出論批判、唯物論批判、そして自然科学主義批判が挙げられていますが、これらはすべて「実体論への懐疑」と「関係の視座の導入」として理解してよいものなのでしょうか。本文中には、「個体とその人格性の実体化への批判」(p.57)という表現があり、そのような理解がしっくりくるように思われます。そうすると、

理解社会学というのが、そもそも「実体から関係へ」という認識のあり方の大転換という文脈に置かれているのでしょうか。この問いには、1990年代に、ソシュール、廣松渉などを通じて流行した社会と個人の「関係主義」的な理解、当時は実体論批判というだけで革新的に見えたその主張が、いまどの程度意味ある主張になりうるのか、ということと関わっています。

社会構築主義などの浸透により、実体論批判＝「主体」批判は当たり前になった部分もありますが、個人から出発する社会科学(経済学や政治学の大半)はいまもメインストリームのようにも思われます。そもそも本書では、「関係主義者ウェーバー」という点を、中野さんはそれほど強調されていないようにも見えます。しかし、方法論的個人主義と関係主義との対立や両立可能性というのは、現在に至るまで十分解かれていない問題でもあります。ウェーバーは個人から出発する関係主義者と言えるので、この点についてもしいま中野さんが語るとするとどういう語りになるのか、お聞きしたいです。

3. 三つめは、他者理解に関わる問題です。これは本書の核心となるテーマです。他者の心を実体として想定すると、他者理解は難しいです。そこに入り込むことは不可能だからです。あるいはそれは、ロマン主義的同一化と奇蹟信仰に陥ってしまう(自他未分あるいは自他の融解)。では他者とは他者なのだ、と言ってしまったら終わるのかというと、そうはいかない。なぜなら、人は他の人とともに生きていかなければならないということは残るからです。

そのため社会学は、実体化＝一般化と、他者の理解不能性との間に立とうとするということなのですが、ではウェーバーはどうやってそれを行ったのか。これが理解社会学の存在理由になっています。つまり中野さんの考えでは、ウェーバーは他者を実体化せず、しかし理解不



能として遮断せず、簡単ではない「理解」の地平を学問的な俎上に載せるために、理解社会学という方法を編み出したということになります。

その方法については、次のように説明されています「当の他者自身においてさえ、その体験を対象的に捉えるためには、すなわち自分の体験を「体験」として判断の「客体」にするためには、「概念」と結びつけて客観化するという論理的操作を経なければならない。この事実が、他者理解可能性の基点にもなります。つまり、そのようにして「客体」とされた「体験されたこと」であるなら、自分のであれ他人のであれ、同様な概念化を通じてその意味を確認し、動機の複合の要因として因果的な行為連関の中に捉えて、それについての判断の妥当性を問うこともできる、この意味で「解明すること (Deutung)」はできると考えられるのです」(pp.52-53)。

このあと本文では、医師と患者の例が出てきます。医師と患者の間では、患者からの痛みの訴え→容態の確認による意味理解→再診、再検査→訴えと容態の確認における理解というプロセスで、対話の中で理解が循環的に進行していくということです。ここではいずれかがあらかじめ持っていた感情や欲求、あるいは客観的事実がただ伝達されるのではなく、双方のコミュニケーションを通じて理解が進展し、関係そのものが次のステージに行くという展開になります。

中野さんはこの部分で、「ヴェーバーは、確かに後者の「当の話者」〔医者と患者の例なら患者自身：引用者補足〕の理解こそ「(語りあるいは行為する)人間の動機をその主観に即して「解明すること」」であると認め、この主観に即した解明による動機の理解と、その動機から発した行為…の客観的な説明〔外部に示された説明：引用者補足〕による意味理解との間にあ

るもうひとつの循環に視野を広げた上で、彼もまたこの循環に内在する動機理解なら可能であると考えようになった」(p.56)と書かれています。

これは、主観的な理解と客観的な説明との違いを両方視野に入れた上で、対話と理解のスパイラルを描くということを指しているのだと思われます。しかし、この部分、ものすごく難解で、しかも医者と患者の例がジンメルとウェーバーの話に入れ子になっていてとても分かりにくいのです。当事者にとっての意味を理解する「解明」という問題とは別の、行為の客観的な説明による意味理解は、医者と患者の例にはどのように当てはまるのでしょうか。「動機から発した行為の客観的説明」とは何を指しているのでしょうか。そして、この部分のジンメルからウェーバーへのつながりが書かれたところと、医者と患者の例とは、本当に整合的につながっているのでしょうか。ここでウェーバーを医師の立場に置き換えて考えればいいのか、あるいは両当事者とも異なる第三者として観察者＝研究者を想定すべきなのか、どうしても明確に理解することができませんでした。

4. 四つめは、『プロ倫』のテーマに関するものです。中野さんは理解社会学の視点から、プロテスタンティズムにおける営利と禁欲との内面的親和性の「理解」を強調されます。一見すると正反対に見える金儲けや蓄財と、徹底した禁欲とが両立する、というより手を携えて進んでいくというのは不思議なことに思えます。古今東西、禁欲主義が金儲けに結びつくなど聞いたこともありません。

この逆説的結びつきの理解こそ、『プロ倫』を有名にしたことはたしかです。しかしだからといって、『プロ倫』を資本主義の起源論として読むべきではない、とまで言えるのでしょうか。たとえばゾンバルトについて中野さんは、「必

要充足対営利」という対立軸を用いて、両者を個人の行為動機と経済システムの稼働原理とに分けずに論じるのがゾンバルトであると、ウェーバーのゾンバルト批判に即して指摘されています。

しかし、ゾンバルトという思想家を、ウェーバーが執拗にこだわった対立軸に沿っていないことを理由に批判すべきなのでしょうか。ゾンバルトは、他者関係、虚飾、誇示などが資本主義の駆動因として果たす役割と、それによって展開する近代の経済活動を描いたのではないかと思います。ここでゾンバルトには、個人の行為動機と経済システムの稼働原理とを分けることへの関心はなく、人間の内面や他者関係の中での「情念」や「欲望」の多様な現れが重要だったと思われます。ゾンバルトにとっては、様々な組織原理と様々な資本主義の起源があること、それを挙げることで資本主義の多面性を表現することが目的だったと思われます。

その意味でゾンバルトとの対比では、ウェーバーの『プロ倫』はやはり、ゾンバルトとは別の狙いを持ち、別のアプローチで描き出された資本主義の起源論に読めると思いますが、この点についていかがでしょうか。

また、個人の動機とシステムの稼働原理との関係については、少し不思議な点があります。中野さんは、「世俗内禁欲の倫理に導かれた職業人の合理性を志向する経済行為が作動すると、当の行為が織りなす経済秩序のメカニクな動きを駆動してあたかも自律的に作動するかに見える強大な秩序界の構成を助長し、今度はこの秩序界の強制力の方が行為者たちの行為を規制するようになっていくという、行為と秩序との間の逆説的な関係性」(pp.125-126)を、ウェーバーが指摘した「世俗内禁欲の意図せざる結果」として描いています。これは、秩序の「物象化」というテーマだと思われます。し

かしよく考えてみると、このあたりのウェーバーの説明は、本当なのかそうでないのか確証のしようがない話のようにも見えます。

世俗内禁欲→合理的経済行為(ここまでは行為者の意味理解の範囲内)→経済秩序のメカニクな動き→強大な秩序界の構成→この秩序界の強制力による行為者の行為の規制、という因果メカニズムの動きは、本当に起こったことなのでしょうか。またさらに、もしこれが起こったとして、禁欲に発する行為が資本主義的経済世界の強制力をもたらしたという説は、現代から見てどれほど重要なのでしょうか。これは、禁欲よりも貪欲の方がリアリティを持つ現代において、禁欲テーゼにどれほどの意味があるのかという問いでもあります。

5. 最後に知性主義批判についてお伺いしたいと思います。中野さんは次のように書かれています。「知性主義という視点を一つ加えてみると、ヴェーバーの言う「西洋文化における特別な形の「合理主義」が覇権を握る時代とは、〈知性〉そのものが矛盾を深める危機の時代だということがこの上なく明瞭なものになってきます。西洋近代ということでもっとも「合理的」と見えたこの時代の基調は、もっとも深い非合理(知性の分裂と反知性主義)によって支えられているということです。知性主義の視点をもってこのことが確認できるなら、そこから知性の分裂を超えるべく「近代的」と名指された時代状況と社会事象への根本的な問い直しが始まります。そして、そのような根本的な問い直しの始まるところにこそ、新しい批判的な知性が主導する新しい生活態度と社会構想の可能性も開かれると希望することができましょう。この知性への覚醒、ここにわたしたちがヴェーバーから学ぶ思想の核心がひとつある、とわたしは考えます」(p.263)。

ここで挙げられているテーマは、知性そのも

のに内在するような反知性的モメント、あるいは合理性が非合理性によって貫かれていること、また合理性の非合理性への、さらには自発性の強制への反転といったものです。これは「啓蒙の弁証法」にもつながるテーマ設定ですが、現在どのくらい魅力があるテーマなのでしょうか。現代はむしろ、反知性主義の方が深刻な問題で、その知性がどんなものであっても知性主義的ならまだマシ、という時代になってしまっていないでしょうか。

そしてとくにネット時代、SNS 全盛期になって、反知性主義も非合理も、そうでないふりすらなくなり、つまり底が抜けてしまっているように見えます。こういう時代には、理性や知性よりも情念や感情の方からアプローチする思想に説得力が増しているのではないのでしょうか。たとえばアーレント、ヒュームなど。そしてまた、主観的な意味の問題を問わないマルクスが、改めて注目されていることにも納得が行きます。「意味理解」の社会学が現在持っている可能性というのはどこにあるのだろうと、知性主義というテーマが最後に出てきたところで、改めて考え込んでしまいました。

以上、雑駁ですが私からの質問です。それこそ「意味理解」が十分でないままの問いかけになっているかもしれません。その点をご容赦ください。

(※当日のレジュメに書かれていたことのうち、時間がなくて質問できなかった部分、あまり重要でないと後で判断した部分はカットしました。また重複する質問は一つにまとめ、順番が入れ替わっているところがあります)